

東京25時

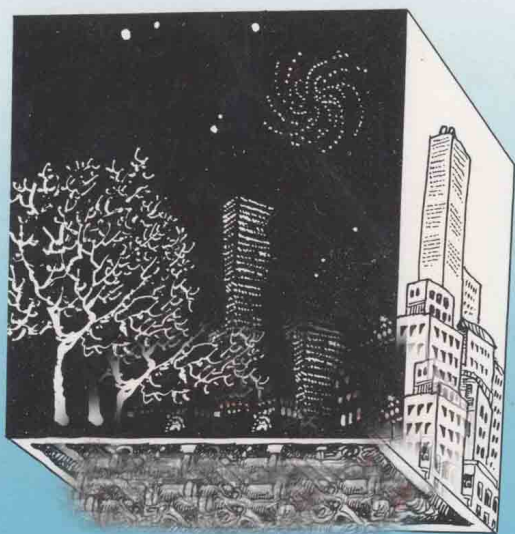
阿刀田 高



文藝春秋

25時

阿刀田 高



東京25時

一九九〇年三月二五日 第一刷

一九九〇年五月一日 第二刷

定価はカバーに表示してあります

著 者 阿 刀 田 高

発行者 豊 田 健 次

発行所 株式会社 文藝春秋
〒一〇二 東京都千代田区紀尾井町三―二三

印刷 凸版印刷
製本 大口製本

© Takashi Aonoda 1990

ISBN4-16-311630-3 Printed in Japan

万一落し乱丁の場合はお取替えいたします

東京25時／目次

膝頭

夜の声

眼には眼を

見えない窓

忘れ坂

青いひとで

銀色のフラスコ

ネクタイ関係

夜のアスパラガス

熊の話

279 249 217 187 157 127 97 63 35 5

掲載誌

「オール讀物」一九八八年二月号～一九八九年八月号

東京
25
時

装
幀

山
田

紳

膝

頭

乱れたスカートの下から千香子の膝がのぞいている。ゆるく、くの字を描くように曲がつて……。

——きれいだな——

初めて気づいたわけではないけれど、真人はあらためてそう思った。きつと膝頭の骨が小さいからだろう。

「欧米人は、そこで日本人と中国人を区別するらしいわよ」

千香子も自分の脚の美しさをよく知っていた。ほどよい曲線を描いて延び、膝の骨もその曲線をそこなわない。

日本人は……おもに女性の場合を言うのだが、たいていこの骨ががっしりしている。相当にきれいな脚でも、膝頭は不細工である。真人はよく知らないけれど、中国人の膝は欧米人と同じように小さく、目立たない関節を作っているのだろう。

「日本人はイエスって言い、中国人はノウって言うそうぞ」

「なんのこと？」

「英語で話しかけるとサ、よくわかりもしないのに日本人はイエス、イエス、中国人はノウ、ノウ。それで区別するそうだ」

「本当に？」

「そう聞いたことがあるけどな」

「へえー」

とりとめのない会話を思い出した。

——こうはしてられない——

カーテンを細く開けた。

マンションの十二階。はすかに視線を落とすと、このビルの玄関が見える。煉瓦の門構え。芝生の植込み。二十六歳の女の住まいにしては贅沢すぎる……。

真夜中だというのに照明が明るく周囲を照らしている。白いテントが見える。機材を積んだトラックも止まっている。作業服の男がしきりに出入りしている。

エレベーターが故障してしまった。

故障なんてものじゃない。メカニズムをすっかり入れ替えるつもりらしい。

「徹夜工事をお願いしておりますが、使えるまでに三、四日はかかるでしょう。ご協力ください」

と、管理人が書いたコピーがドアに挟んであった。このマンションのエレベーターは一カ

所にしかない。あとは階段を利用するよりほかにない。高い階に年寄りはいないのだろうか。

真人自身は、このごろ運動不足で、腹が始めて来た。階段を昇るのも少しは体にいいだろう。努めてエレベーターを使わないようにしている。

今日も頑張つて十二階まで階段を踏んであがった。

あのときすでにエレベーターが故障していたのかどうか、気づかなかった。

——いつまでかかるんだ、まったく——

カーテンを閉じ、リビングルームを横切つてソファに腰をおろした。

この位置からはベッドは見えない。

「タバコ……ないよな」

声をかけたが返事はない。替つて壁の鳩時計が十二時を打つ。

真人はずっと禁煙を続けている。ひどく喫^すいたいときがある。今がそう。でも今はけつして喫つてはいけない。

気がつくとき、眼の前の棚に、壘^き詰め^めのヨットが飾つてある。

顔を近づけて覗き込んだ。

海のイメージが心に広がる。海の匂いが薫った。

あのときも滑らかな膝頭だった。白く、美しい素足だった。

千香子ではない。

二十年よりもっと昔……。真人は高校三年生になったばかりだった。

従兄のターちゃんからモーターボートを貸してもらい、春休みのあいだ、ほとんど毎日のように乗っていた。

金沢八景の海。横浜の自宅から毎朝電車を通った。

船つき場は古い板敷の桟橋だった。ところどころに穴があいている。新しい板で補修したところもある。モーターボートがほんの四、五隻もやっているだけだった。

すぐそばにボート小屋があり、水面を滑らせて、そこに格納することができた。

午前中いっぱい走らせて、お腹がすくとパンとコーヒ―牛乳。それを売る雑貨屋が近くにあった。

ほとんど人気がない海だった。

昼近く、真人が桟橋にボートを繋ぎ、あがろうとすると、眼の前に白い脚があった。

水玉のワンピース。白地に紺。そして形のよい二本の脚……。そんな記憶が鮮明に残っているのだが、細かいところは少しちがっているかもしれない。たとえば、紺地に白の水玉だったとか……。

「お昼ご飯を食べるの？」

声をかけられ、視線をあげると脚にふさわしい上品な面ざしの女が立っていた。

「はい」

それが「秋さん」だった。

秋さんの名を呼んだことは一度もない。当人が「アキコっていうの」と告げていた。だから、秋さん……。本当は字もわからない。どことなく秋の気配に似ていた。だから、秋さんと書く。

「いつもパンと牛乳なの？」

「はい」

秋さんはどこかで少年の習慣を見て、知っていたらしい。

「それじゃあ、栄養がつかないんじゃない。結構重労働なんですよ」

「そうです」

これは本当だ。お腹がペコペコになる。たいいていカレー・パン二個とメロン・パン二個、サンドウィッチとコロツケを食べるけれど、すぐにまたなにか食べたくなる。お小遣いが少ないからそうたくさん買うわけにはいかない。

「ご馳走してあげるわ」

「でも……」

理由がわからない。

「遠慮しなくていいのよ。このへん、たいしたもの、ないから。さ、車にお乗りなさいな」
近くにモス・グリーンの車が停まっていた。

「運転するんですか」

「そうよ」

まだ女性のドライバーがめずらしい頃だった。助手席に乘せてもらうのが、わけもなくうれしい。

「はい、どうぞ」

勧められるままに乗ってしまった。

——誘拐かなあ——

そんな馬鹿なことを考えた。少し不思議な出来事……。

——俺を誘拐したって、なんのたしにもならんものなあ——

ハンドルを握っている横顔は、とてもそんな人には見えない。

三十代のなかばくらい……。年齢は最後まで聞かなかった。でも美人。若い人どちがった美しさがある。

——これが色気って言うのかな——

少し背のびをして、そんなことを思った。

秋さんの容姿について、まず思ひ出すのは色の白さである。滑らかで、潤いがある。口紅をくつきりと引いていた。

それから眼。少しはすかいに視線が飛んで来る。眼そのものの大きさは普通と変らないけれど、じっと見つめるので、なんだか少し大きいように感じられる。

太ってはいなかった。

指などは、力を入れると、骨のありかを感じさせるように筋張る。そんな特徴をばんやり
と思ひ出す。

でも……『着痩せ』という言葉を知ったのは、もっとあとのことだったろう。多分大学生
の頃。なにかの拍子に『着痩せ』という言葉に出会い、

——ああそうか。たとえば、秋さんのことだな——
と、納得した。

はじめは、ただ痩せてる人だと思った。

連れて行かれたのは自動車でほんの四、五分の距離。

「ここよ。たいしたところじゃないけど」

白壁のレストラン。若い緑の蔦が這いあがっている。

「お金、持ってません」

それだけは言っておいたほうがいい。

「いいのよ、ご馳走してあげる」

笑いながら言う。

店はすいていた。

「なんでも、どうぞ」

なにを選んでいいかわからない。

「なんでもいいです」

「お肉にしなさい。ステーキ」

「はい」

料理が出て来るまでに少し時間がかかった。なにを話したのか……。モーターボートのこと。家族のこと。学校のこと。読書のこと。

「どんな本を読むの？」

「いろいろ。『大地』とか」

少し恰好をつけて言った。

「ああ、パール・バックね。シェクスピアなんか読まないのかしら」

「読んだことはないけど、映画で見ました」

「なーに？『ハムレット』？」

「あ、そうです」

中学生のとき、学校で連れて行かれた。黒白の、暗い画面。幽霊が出て来て……。フェンシングをやっていた。

「私も見たわ。ローレンス・オリヴィエでしょ」

「はい……」

ステーキはとてもおいしい。肉も厚い。安くないぞ。

——でも、いいのかなあ——

それが心配でならない。心配しながらもご飯のおかわりをした。